

長野明子（2014年度日本英語学会賞（論文）受賞）

この度は拙論“Morphology of direct modification”（*English Linguistics* 30:1）に対し日本英語学会賞（論文）を賜り大変光栄に存じます。*EL* 掲載時に査読をしてくださった査読者のお二人と、今回の学会賞審査の審査員の方々に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

この論文は、*an old friend*の形容詞の多義性に例示される、名詞の直接修飾と間接修飾の区別について、Robert BeardのLexeme-Morpheme Base Morphologyの観点から論じたものです。英語の名詞修飾をみたとき、一方に(1a)(2a)のように直接修飾できない派生形容詞（関係形容詞）があり、他方、前置詞句は(1b)(2b)のように間接修飾しかできないという事実があります。

- (1) a. a *cellular* structure                      b. a structure *of cells*  
(2) a. a *preadverbial* expression              b. an expression *in front of an adverb*

とすると、関係形容詞とは、前置詞句が直接修飾という統語環境の要請で取らざるを得ない屈折形（contextual inflection）のようなものではないか。実際、次のように、様々な句が直接修飾環境では形を変えて出てきます。

- (3) a. a *blue-eyed* girl                              b. a girl *with blue eyes*  
      b. a *British-based* company                b. a company *based in Britain*  
      c. *Swedish-Irish* trade                      b. trade *between Sweden and Ireland*

上記(a)と(b)の斜字体部分をつなぐことを可能にするのが、分離仮説（the separation hypothesis）という現代形態論にとって重要な仮説です。音と意味を分離すれば、(a)の直接修飾子と(b)の間接修飾子の間の統語的相補分布や、(1a)(2a)の関係形容詞の形態的複雑さの差が(1b)(2b)の前置詞句の形式的複雑さの差と対応していることなどを説明することができます。ソシュールの記号概念を超えて分離仮説を生み出したのは生成文法であり、この論文を書くことで生成文法の面白さを改めて実感することとなりました。

個別にお名前は挙げませんが、津田塾大学の恩師の先生方とレキシコン研究会の先生方のご指導に、改めてお礼申し上げます。また、東北大学情報科学研究科の皆様、筑波英語学会の皆様には、研究を続けるための場所のみならず、共に研究する喜びを与えてくださっていること、感謝いたします。この度の受賞を励みに今後も研究と教育の仕事に精進して参りたいと存じます。